

「科学的である」ということ

むつ総合病院 副院長 坂井 哲博

科学の特徴は、普遍性（例外なくいつでもどこにでも妥当する）、論理性（主張が首尾一貫しており理論の構築や用語に至るまで一義的である）、客観性（ものごとの存在が主観によって左右されない）である。この三つの特徴が統一されて信頼性が飛躍的に高まり、説得力を獲得してきた。

しかし「現実＝臨床」はこれとは違い、普遍性ではなく個別性、論理性や一義性ではなく多義性、客観性ではなく相互作用性の世界である。

分り易く例えると、私は医師であり公務員である。父であり夫なのだ。母の子であり娘の父でもある。どれもが本当の自分であり、例外なくいつでもどこにでも妥当する自分などありえない。個別性である。

臨床の場では、治るのか治すのか、待つのか今なのか、成功なのか失敗なのか、良かったのか悪かったのか、引くのか進むのか等の二律背反の真理に直面する。一見相反するような事柄が同時に多義的に存在する。決して主張が首尾一貫して 理論の構築や用語に至るまで一義的であることなどない。多義性である。

「指導医から、いろいろうるさく言われる。励ましてくれているのだろうが少しもうれしくない」といった経験は皆お持ちであろう。いかに正しい答えを返しても相互作用が欠けていると相手に響かない。相互交流や影響し合う関係がないと受ける側は潤わず うれしくない。かえって浅いものを感じる。ものごとが主観によって左右されないなどありえない。主観によって大きく左右される。しかし社会生活では無いものとしている。これを積極的に認めると科学法則が成立しなくなる。科学の特徴の一つである客観性は 多くのものを削ぎ落としており、「現実＝臨床」は相互作用の世界と言えるであろう。

さて、医学は科学の一分野として発展してきた。むろんこれからもそうである。普遍性、論理性、客観性をもって臨床現象解明に切り込んでいかなければならない。しかしあくまで「現実＝臨床」の一側面からのアプローチであることを忘れてはならず、臨床現実の個別性、多義性、相互作用性を感じ注目する姿勢が大切である。100人中90人に効果が見られた！立派なエビデンスだ。しかし効かなかった10人を注視するのが臨床医であり、平均値で語られるおびただしいエビデンスを前に「平均値からはずれた人を患者と呼ぶ」ことを忘れない臨床医でありたいと思う。